

平成三十年度「全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会」

(知事賞) 最優秀賞

(中央審査) 経済産業大臣賞

めぐる一筋の水

今治市立近見中学校 二年 森 温大

一筋の水にどんな道のりがあったのか、僕らは知らない。「タオルづくり」と聞いて頭に思い浮かぶのは、大きな織機、鳴り響く音。僕もそうだった。今までは。

染色工場のオープンファクトリー。目の前の光景に、僕は興奮した。固く巻かれた糸を柔らかく巻き直す。植物である綿糸についた天然油分を洗い落とす。これらの下準備がなされて初めて、糸は染料を吸い、色を変える。

染色では、水が大きな鍵を握る。今治平野を流れる高縄山系の良質な軟水。石鎚山からの地下水。今治のタオルづくりを支えているのは、美しく豊富な水資源に他ならない。

見学させていただいた工場では、一日に四、五トンのタオルを染める。そのためにその十倍の水を使う。使用後は環境に影響を及ぼすことがないよう充分な処理を行い、瀬戸内海に返す。水なしでは成立しない産業だ。

かつて、この町を流れる川は「七色の川」と呼ばれていたそうだ。「川の水が、ピンクや黄色だったんよ。」

母は、幼い頃に見た近所の川の様子を話してくれた。高度経済成長期におけるタオル生産量の急増。それに伴い、川沿いには染色工場が立ち並び、大量の染色排水が直接川へ放流された。結果として、小魚やエビは姿を消し、住民の安全な暮らしさえ脅かされていった。そこで、今治市では、河川事業と下水道事業が一体となり清流復元に向けた取り組みが進められた。現在では、川は本来の水の色を取り戻し、「七色の川」の面影はない。魚や亀が自由に泳ぎ野鳥が羽を休めている。「水に使わせてもらっとるんよ。水は、糸や生地の色や発色、やわ

らかさと大きく関係する。だから、一滴の染料も、一滴の水も、私は無駄にしないんよ。」

かみしめるようにそう話してください。職人さんの言葉が胸に響く。今まで僕は、一度でもこんな風に考えたことがあっただろうか。

水は、町を、暮らしを、循環する。血液が体中に行き渡るように。物言わず、等しく。

だが、穏やかに流れる川面のそばで、僕らはそれを当たり前に思っていないだろうか。「絶えることのない清らかな水」。その水は、本当に絶えることはないのだろうか。

昨年開催されたえひめ国体。ボート競技会場となった玉川ダムは、洪水による被害を軽減するとともに、農業用水や生活用水、さらにタオルづくりをはじめとする工業用水を確保するために築造されたものだ。玉川ダムの完成後、洪水や水不足に悩まされることはほとんどなくなった。しかし、昨年は、競技開催が危ぶまれるほどの渇水。一転して、台風による集中豪雨。ダム下流には氾濫危険水位まで土色の濁流が押し寄せてくるなど、水の怖さとダムのありがたさを改めて思い知らされる年となった。たった一つのほころびから、水はいとも簡単にこぼれ落ちていく。

染色工場にあるボイラー用や洗浄用以外にも、近年ではI・C産業や医薬品産業で新たな水需要が台頭してきている。と同時に、昭和四十年代には平均三六パーセントほどだった工業用水の回収率が、現在では約七九パーセントにまで上昇しているという記録を見つけた。まさに「一滴の水も無駄にしない」あの想いの賜物だろう。農業用水、生活用水、工業用水。めぐるのは同じ一筋の水なのだ。

僕は、この町が大好きだ。この町の産業が大好きだ。十年後、僕らが未来を拓く。限りある自然の恵み。その水を大切に「使わせてもらって」子や孫にバトンを渡そう。何度も何度も、水と人との関係を見つめ直そう。今よりもっとうまく共生できるように。まっさらな気持ちで、背筋を伸ばし、新しい知識や経験を吸い込もう。蛇口を閉める手に力を込める。この町の一員である誇りを持って。

一筋の水にどんな道のがあったのか、僕は知っている。